エッセイ

西洋古代地名・人名のカタカナ表記をめぐって

野中　夏実

昨年六月、一年半かかってようやく翻訳『ギリシア・ローマ歴史地図』が完成した。原書は Atlas of Classical History, ed. Richard J. A. Talbert, Croom Helm, London & Sidney, 1985 で、ギリシア・ローマ関係の専門家によって学生や一般の読者を対象に編まれた、地図と解説を組み合わせた参考書である。時代的にはおおざっぱにいって新石器時代から初期キリスト教時代まで、地域的には西はブリタニアから東はインドまで、北はバルト海から南はアフリカ大陸までの広い範囲にわたっている。地図の作成には当然のことながら複数の研究者が携わっており、地名の表記は、原著者の序文にもある通り、現在のところ完璧な解決法が存在しないため、ラテン語の綴りが採用される場合が多く、項目間あるいは地図と解説文の間に不統一が散見される。地図の部分の翻訳を担当し、そうした地名を日本語のカタカナに置き換えるという作業を通して、カタカナ表記の問題性を痛感した次第である。

翻訳にあたってまずいくつかの原則をたてた。原則といっても必ずや例外が出てくるであろうから、一貫性はあまり期待できないのだが、とにかく原綴りで同じ文字が用いられているものには、同じカタカナを充てることである。ギリシア語地名では、語尾の -ος/ -us 、-ον/ -um はそれぞれ「オス」、「オン」で置き換える。たとえば Miletos は「ミレトス」、Pharsalus は「ファルサロス」、Pergamon は「ペルガモン」、Byzantium は「ビュザンティオン」であるというように。それから -υ- は、Olympia「オリュンピア」、Tiryns「ティリュンス」のように「ュ」で表す。-σσ-、-ττ- は、Halicarnassos「ハリカルナッソス」、Adramyttium「アドラミュッテイオン」のように、撥音で表す。χ は Chios「キオス」、Acharnai「アカルナイ」のようにカ行で、φ は Delphi「デルフォイ」、Philippi「フィリッポイ」のように半濁点をつけずにファ行で表す。ただし現在も使われている地名で日本語でも定着しつつあるものは、それを優先させた。

たとえば Cypros は「キュプロス」ではなく「キプロス」、Alexandria は「アレクサンドレイア」ではなく「アレクサンドリア」とした。さらに先史時代の遺跡等で現代の地名が呼び名となったものは、現代ギリシア語による発音をもとにしたカタカナに置き換えた。たとえばメロス島の Phylakopi 「フィラコピ」、スパルタ近郊の Vaphio 「ヴァフィオ」など。なお音引きや -ρρ- や -λλ- の場合は極力簡略化に努めた。

ローマ時代になると事情はもっと複雑化する。イタリア半島の地名は、現代名を除いて原則としてラテン語読みにした。ただし山・河・湖の名前は現代イタリア語名を採用し、古名は必要に応じて括弧内に示した。しかし街道名など形容詞形が用いられているものは、どうしたものか迷うところである。Via Appia というのはもともと Appius の街道という意味であるが、ヨーロッパ語のように名詞に対応する形容詞をもたない日本語ではどう表現すべきであろうか。Via Appia の場合は「アッピア街道」という訳が定着しているのでそれにしたがうとしても、Via Aemilia、Via Flaminia、 Via Aemilia Scauri となるとどう訳せばよいのだろうか。「アエミリウス街道」、「フラミニウス街道」、「アエミリウス・スカウルス街道」か、それとも「アエミリア街道」、「フラミニア街道」、「アエミリア・スカウリ街道」か。まるで「アエミリア」、「フラミニア」というものが存在するかのようであるが、「アッピア街道」に合わせてそうすることにした。それから厄介なのがマグナ・グラエキアとシチリアの地名である。たとえば現在 Taranto 「ターラント」と呼ばれる都市は、もともとギリシア植民市 Taras「タラス」だったが、ラテン語名は Taras にラテン語尾をつけた Tarentum「タレントゥム」と Colonia Neptunia「コロニア・ネプトゥニア」の二つある。それらはどのように使い分けられていたのか、それぞれいつ頃から使われていたのか、並行して使われていたのかなど、単なる地名の表記にとどまらない大きな問題へと発展していく。Poseidonia「ポセイドニア」/ Paestum「パエストゥム」の場合も同様である。こうしたものは地図上で示すか、または索引に入れるかのいずれかの方法を採った。

ローマ時代の西方ラテン語圏については、古名はラテン語読み、現代名は英・仏・独などの現代語読みにした。東方ギリシア語圏については、ギリシア時代の地名を引き継ぐものはギリシア語読みに (「ビュザンティオン」など)、ローマによって新しく築かれた都市の名前は Pompeiopolis「ポンペイオポリス」、Hadrianopolis「ハドリアノポリス」のようにラテン語読みにした。また Jerusalem イェルサレムの場合それはユダヤ名で、ギリシア名は Hierosolyma「ヒエロソリ

ュマ」、ラテン名は Aelia Capitolina「アエリア・カピトリナ」である。そういう場合は地図上あるいは索引で網羅するよう努めた。

さてこのような原則をたてても、矛盾は避けられない。たとえば小アジアからインドにいたるまでの地域に「アレクサンドリア」と名のつく都市は少なからずある。それらはアレクサンドロス大王によって築かれたためにそう呼ばれている。エジプトのアレクサンドリアのように単独で用いられる例は問題ないが、それに形容詞が付された Alexandreia Eschate のような例では、日本語で定着しているラテン語読みの「アレクサンドリア」とギリシア語形容詞「エスカテ」(「さいはての」の意)を組み合わせて「アレクサンドリア・エスカテ」としなければならない。

このように、問題は主としてギリシア語名、ラテン語名をどう扱うか、歴史的に正確な地名と日本で定着している地名といずれを優先させるかといったことに集約される。

外国語固有名詞の和訳では、古代ギリシア語、ラテン語、英・仏・独・伊・希等の現代語の発音にしたがってカタカナに置き換えていくという方式が一般的である。しかしヨーロッパ諸語では、逆に外国語固有名詞を自国語式に読み換えるという方式が採られているようである。

パリからミラノに向かう途中、ローザンヌで乗った列車で前の席にすわっていたイタリア人らしい老人が、「セイ・モンタータ・ア・ロザンナ、ヴェーロ?」と話しかけるので、「ロザンナ」とはいったいどこのことなのだろうかと思っていると、しばらくたってそれがローザンヌのことであると気がついた。スイスのフランス語圏の都市 Lausanne のことを、日本では「ローザンヌ」というが、イタリア語では Losanna 「ロザンナ」というのである。フランスの首都はフランス語で Paris 「パリ」、英語で Paris 「パリス」、ドイツ語で Paris 「パリース」、イタリア語で Parigi 「パリージ」、現代ギリシア語で Παρίσι「パリーシ」であるが、日本語ではフランス語読みの「パリ」を用いている。同様にバヴァリアの都市 München「ミュンヘン」は、英語・フランス語で Munich 「ミュニック」、イタリア語で Monaco 「モナコ」、現代ギリシア語で Μόναχο「モナホ」であるが、日本語ではドイツ語読みの「ミュンヘン」を使っている。

この方式は地名にかぎらず、人名にもあてはめられる。学部のときフランス人の先生によるギリシア悲劇の講義の最初の時間に出てみると、「エシル」とさかんに繰り返しているので、何か重要なことにちがいないようだがいったい何だろうかと思っているうちに、しばらくたってそれがアイスキュロスのこと

だとわかったということがある。フランス語では Αἰσχύλος のことを Eschyle「エシル」というのである。同様に Ὅμηρος「ホメロス」はフランス語では Homère「オメール」であり、Πλούταρχος「プルタルコス」は Plutarque「プリュタルク」であり、Vergilius「ウェルギリウス」は Virgile「ヴィルジル」となる。そこでは原語に忠実であろうとする複雑な配慮は、最初から放棄されているかのごとくに見える。

高校の世界史の授業で、神聖ローマ皇帝カール V 世は、同時にスペイン王カルロス I 世でもあったということを習ったときに、同一人物でありながら二通りの名前をもつことを不思議に思ったのを覚えている。また最近ポンペイ近郊のヴィラの発掘についてのイタリア語の文章を訳していたときに、Francesco I di Borbone という人物の名をどう表したらよいものか迷った。もともとフランスの家柄である「ブルボン家」に合わせてフランス語式にすると、有名なルネサンス時代のフランス国王と同じ Francois Ier (de Bourbon)「フランソワ I 世」となる。逆にイタリア国王であることからイタリア語に統一すると「ボルボーネ家のフランチェスコ I 世」となり、王家名が日本人にとって聞き慣れないものとなってしまう。結局不統一は承知の上で、「ブルボン家のフランチェスコ I 世」という折衷的な訳に落ち着いた。

それからギリシア・ローマ神話の神々の名前がたとえばフランス語に採り入れられたものなどはどうすべきなのだろうか。担当しているフランス語の授業で、フランス文化紹介の一環として、ヴェルサイユ宮殿とその庭園の話をしたことがある。宮殿の部屋のいくつかには、Salon d'Hercules, Salon de Mars, Salon d'Apollon といったギリシア・ローマの神々の名前が付せられている。また広大な庭園にも、Fontaine de Latone, Bassin d'Apollon, Bassin de Neptune, Bain des nymphes de Diane といったようなやはりギリシア・ローマの神々の名前を冠した泉水や噴水がある。授業ではあまり深く考えずに、「ヘラクレスの間」、「マルスの間」、「アポロンの間」、そして「ラトナの泉水」、「アポロンの泉水」、「ネプトゥヌスの泉水」、「ディアナのニンフの水浴の泉」という風に話したのだが、あとで学生に感想を書かせたところ、それらはもともとギリシア神話に由来するものであるから、ギリシア式にすべきなのではないかということを書いた学生がいた。すなわち、「マルスの間」ではなく「アレスの間」、「ネプトゥヌスの泉水」ではなく「ポセイドンの泉水」、「ディアナのニンフの水浴の泉」ではなく「アルテミスのニュンファイの水浴の泉」等々とした方がよいのではないかというのである。そういわれてみると、たしかにその方が一貫

性があることはたしかである。しかし Neptune や Diane といった神々の名はラテン語を経てフランス語に入ってきたものであり、フランス文化の枠内におさまっているそうした名前に対して、「ポセイドン」、「アルテミス」というカタカナを対応させることにはどうも違和感がある。

つまり、固有名詞等のカタカナ表記はそれ自体さまざまな矛盾をはらんでいるものである。しかし今のところ完璧な表記というものはまだ存在しないのであるから、我々としては、原語の発音に忠実であることと、日本人にとってわかりやすいものであること、という二つの基準の間でバランスを取りながら、適切な訳語を模索してゆかなければならない。このように用語のレヴェルで逡巡しているのは、いかにも不本意なことと思われるが、外国文化の研究を日本語でつづけていく以上やむを得ないことであろう。